奥州街道

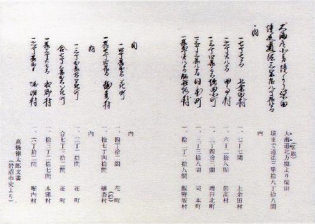
徳川幕府により定められた五街道の一つ奥州街道は、正式に江戸の千住宿から福島の白河宿に至る27宿の街道のことです。

それ以北は特に呼び方を定められてはいませんでしたが、江戸を起点にすれば「奥州道中」、仙台城下の芭蕉の辻を起点にすれば「江戸往還、江戸道中」ともいわれ、一般的には奥州街道として扱われています。

この街道は、伊達政宗公の仙台城下の整備に関連し「家街道御覚」により、旧街道を基とせず新たに整備された東北の表日本を代表する幹線道路です。

江戸仙台間は、69次92里30町（364.58㎞）で街道の幅員は3間（5.45ｍ）、宿駅では5間（9ｍ）あり、街道沿いには松並木や一里塚も整備されていました。

Ⅰ-4-①



Ⅰ-4-②

芭蕉の句碑（道祖神路）

館腰神社のすぐ前を通る奥州街道（旧国道4号線）を南に約400m下り、川内沢川にかかる橋のすぐ南に「芭蕉の句碑」が建っています。別名「笠島塚」・「芭蕉塚」とも呼ばれています。

碑の正面に大きく道祖神路と刻まれ、北面に道祖神社や中将宮方の由来、碑建立の趣旨が説明され、道祖神社、名取川、仙台城下への距離が刻まれていることから一種の道標と考えられます。また、南面には「笠島はいづこ皐月のぬかり道　はせを」と見事な筆跡で芭蕉の句が刻まれています。

なお、この碑は安政3年（1856）に仙台の小西利兵衛と地元の人々によって再建されたもので、それ以前は「笠島塚」といわれる道標があったということです。

Ⅰ-5-①

Ⅰ-5-②

Ⅰ-5-③

載　松

Ⅰ-5-③